

ニジェール支所便り

2019年5月号

【編集長】山形支所長 【編集担当】佐々木企画調査員

Tel: (227) 2073 5569 Fax: (227) 2073 2985 E-mail: ni_oso_rep@jica.go.jp

★ニジェール支所便りが JICA ニジェール支所の HP でも閲覧できるようになりました！懐かしのバックナンバーにもここからアクセスできます!! ⇒ <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/index.html>

今月のトピック



- 支所からのひとこと ～今月のニジェール短歌～
- 新シリーズ:短期出張者が見たニジェール 竹越久美子 SHEP 西アフリカ広域専門家
- 4月の支所の活動報告
～中村専門員による新プロジェクト PASVA 運営指導の実施
- プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介
～PASVA:農業普及システム改善プロジェクト～
～みんなの学校:住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2～
- ニジェールにおける活動紹介
～ニジェールでゴミを集める日本人 第 18 話 ー尊敬の道と忠誠心 フルベのチーフ～
- 編集後記

支所からのひとこと ～今月のニジェール短歌～

ドアが開き熱波の中に飛び出でて

サヘルに伸びる滑走路に立つ

赴任した時、あるいは休暇が終わった後、飛行機が空港に着いてドアから外に出た途端に押し寄せてくるあの暑気。いつも、ニジェールに戻ってきたんだと実感が湧きます。特に今は、年で一番暑い時期。屋外に出た途端に殴りつけてくるような「熱さ」、またこの時期がやってきたと、感無量です。

今年はこの時期がラマダンに当たります。無事に終わらんことを。

最後の巻頭短歌に寄せて、サヘルの平和を祈ります。



山形支所長

短期出張者が見たニジェール！

『支所便り』冒頭を飾る山形支所長の短歌に続き、すっかりこの位置に定着した「短期出張者が見た」シリーズ。今月も先月に続き SHEP 西アフリカ広域専門家の竹越久美子さんに投稿いただきました。ニジェールのみならず、サヘル地域の多くの国々を知り尽くす竹越さんの舌を唸らせたニジェールならではの**アノ味**！実はニジェール周辺の国々でも、ニジェール名産品として**キリシ**と共に人気の高い食品です。それでは、皆さま、写真と共に楽しみください！

バッタを食す

おそらくニジェール便りを読む方にとっては周知の事実だと思うのですが、アフリカのサヘル地域では、バッタが大発生することがあります。サバクワタリバッタあるいはサバクトビバッタと呼ばれる少し大きめのバッタ。FAO が毎年バッタ予報を出していますが、大発生すると予報が全く意味をなさないほど人の手に負えなくなります。

サヘル地域の農業省出先機関の重要な任務の一つがサバクトビバッタの退治で、殺虫剤が大量にストックされていて、バッタの発生情報があるといち早く現場に駆け付け対応しているんですが、毎年バッタ発生時期は、農業省地方職員とアポがとれないんですよね。「バッタ退治でいないよ」と何度言われたことか。

で、前段はさておき、ニジェールはバッタを食べる文化があります。

昆虫は概して良質のタンパク質を摂取できますし、鉄や亜鉛などのミネラルも豊富。ニジェールで売られているバッタは、タンパク質の含有率 50%らしいです。



このバッタ、サバクトビバッタだとばかり思っていたのですが、違うみたい。サバクトビバッタを食べる地域もあるとどこかで読んだ記憶があるのですが、ニジェールでは食べないそう。食べてみたい好奇心に駆り立てられ、マーケットで買ってきてもらいました。

聞くところによると、捕まえたバッタは、一旦塩を入れた熱湯で湯がき、天日干しされているそう。ちゃんと羽も後ろ脚先の固い所も処理してあって、商品としては完璧。でも、以前隣国で、「ニジェールのバッタ」と称されたもの（下の写真）を食べたんですが、淡白で味がなかったのですよね。それが、本場のバッタはとてもカリカリしていて、甘辛味が絶妙。なるほどね、こうして少し味付けをしてから食べればよかったですね。日本の佃煮のようなイナゴよりもおいしいかも！さすが「あの」キリシ（ニジェール版ビーフジャーキー）を開発した国。美味しい食べ方が分かっています。



余談ですが、文頭に書いたサバクトビバッタについては、前野ウルド浩太郎さんという研究者がいて、サバクトビバッタの魅力にどっぷり浸かってしまう面白い本を出されています。支所の佐々木さんに教えてもらって読んだら、バッタの「相変異」に魅了されてしまい、2冊目のモーリタニア編も購入。おすすめです。

4月の支所の活動紹介

【中村専門員による新プロジェクトPASVA¹ 運営指導の実施】

支所便りではすっかりお馴染みとなった中村専門員が、4月16日～24日の日程で再びニジェールを訪れました。今回の渡航目的は、3月末から新たに始まった「農業普及システム改善プロジェクト」の運営指導調査です。滞在期間中はこれまでのSHEPサイトをプロジェクトメンバーと共に視察したり、プロジェクトのカウンターパートとのタスクフォース会議に参加したり、またその合間にプロジェクト専門家の皆さんと議論を重ねながら要所要所でプロジェクトへの提言やアドバイスなどを頂きました。

プロジェクトの対象地域はニジェール全国ではあるものの、日本人専門家はニアメ外への渡航が実質できない状況下での遠隔・地方展開という難しい舵取りをしなければなりません。限られた人員と実施期間、そして予算で、いかに効率的かつ効果的に

¹ 農業普及システム改善プロジェクト（Projet d'Amélioration du System de Vulgarisation Agricole の頭文字をとったもの）

SHEP アプローチを全国の普及員に習得してもらい、ニジェールの農業普及サービスの質の向上を図るか、そして最終的にできるだけ多くの農家さんに裨益させることができるか、中村専門員とプロジェクト専門家が腹を割って話し合いました。他国における SHEP の事例なども引用しつつ、ニジェールにおける SHEP を初っ端からつづさに見てこられた中村専門員の言葉は、専門家の方々にとっても非常に参考になったようです。

幸い現在ニジェール入りしているメンバーは、2015 年 12 月に終了した農業技術協カプロジェクト VRACS²のメンバーで、ニジェールにおける農業普及システムや営農について精通されている方々ばかりです。ニジェールにおける遠隔でのプロジェクト運営もすでに経験済みでもあるので、先のプロジェクトの経験や人脈を大いに活かし、これから 5 年間頑張っていって欲しいと思います。



既存の SHEP サイトでの聞き取りの様子（向かって左端が中村専門員）

（企画調査員 佐々木タ子）

プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

■ ■ PASVA: 農業普及システム改善プロジェクト ■ ■ ■ ~プロジェクト概要と専門家の方々の自己紹介~

本プロジェクトは、「ニジェールにおける農業普及サービスの質が向上すること」を目的に、2019 年の 3 月からの 5 年間の予定で実施されます。対象はニジェール全 8 州、拠点は首都ニアメの農業牧畜省及びニアメ州農業局です。このプロジェクトは、JICA が広くアフリカ地域で実施している、SHEP 広域化案件の一つで、ケニアの JICA 農業プロジェクトにおいて開発された市場志向型の農業普及手法である SHEP アプローチを取り入れた活動を実施して行く予定です。

プロジェクトで目指す成果は、次の 5 つです。

- 【成果1】農業省の普及員養成機能が向上する。
- 【成果2】現職の農業普及業務者の農家指導能力が向上する。
- 【成果3】IPDR 農学部が現地ニーズに即した農業普及について理解する。
- 【成果4】市場志向型農業を取り入れた普及サービスが確立される。
- 【成果5】ニジェールの農業普及政策に市場志向型農業が導入される。

プロジェクトの C/P 機関は農業省の DVTT (普及技術移転局)、ニアメの本省に勤務するのは 8 名の小所帯ですが、ニアメ州を含むニジェール国内各州に配置されている 250 名を超える全普及員が主な技術移転の対象となります。加えて、本邦において SHEP アプローチを学んだ、課題別研修参加者 11 名も重要なパートナーです。

プロジェクトでは成果を達成するために、おもに普及員や農民組合組織 (農民組合連合) などで普及を担当する職員に SHEP アプローチをはじめとする普及手法の研修を行い、そこでニジェールのニーズに即した普及手法を学んだ普及担当者が農家、農民組織などを対象に現場での指導や能力強化を行います。また、中央省庁からは必用に応じて職員を補強指導に派遣し、必要なフォローも行います。

日本人専門家は、農業普及、園芸栽培 (SHEP、栽培技術)、研修を担当する専門家全 5 名で構成され、DVTT に加え、ニジェールの農業普及などを担う教育機関である農業実践開発大学校 (IPDR: Institut Pratique de Développement Rural) と

² 2012 年 3 月～2015 年 12 月にわたって実施された「ニジェール国サヘル地域における貯水池の有効活用と自律的コミュニティ開発プロジェクト」 (VRACS) 詳しくはこちらをご参照ください。 http://open_jicareport.jica.go.jp/833/833/833_523_1000024670.html

も密接に協力して活動を行います。昨今の周辺国を含むニジェールの治安状況を踏まえ、日本人専門家はニアメ市内にとどまりますが、少数精鋭の DVTT 職員や本邦研修参加者と協力して、プロジェクト実施します。

今回、農業普及システム改善プロジェクト(略称: PASVA)で総括を務めさせていただく事になりました小川慎司(所属: アイシー・ネット株式会社)です。ニジェールは前回の VRACS プロジェクトと今回で2回目で、また戻ってこれて本当にうれしいです。ニジェールのよいところはのんびりとしたところとひとのよさでしょうか。前は普及手法担当でしかも専門である FFS を主に指導していたのですが、今回は初めて SHEP 案件を担当させていただくことになり、身が引き締まる思いです。ニジェールにおいては 2016 年から毎年数名が本邦の SHEP 課題別研修を受講してきており、研修生が帰国後支所の方々のフォローアップに支えられて地道な活動を続けてきています。プロジェクトではそういった基盤を大切にしながら、可能な限りの改善をいっしょに試行していきたいと思っています。これから5年の長丁場になりますが、皆様の温かきご支援のほどよろしくお願い申し上げます。



PASVA 副総括/農業普及 2 長井宏治

先行案件である VRACS の最終セミナーから約 3 年少々が過ぎましたが、ニアメに戻ってきました。しかも、ニアメでは今年の 7 月に AU(アフリカ連合)の総会があるということで、空港からニアメ市内へのアクセス道路、ホテルの建設等が町のあちこちで見られること以外は大きな変化は、「良くも、悪くも」ありません。

プロジェクトの C/P 機関においても、前回の C/P だった人材、局長などは同じ職位のままでした。こちらも、それでよいのか。。。

今回は、副総括ということで、プロジェクトのマネジメントも行いながら、5 年間腰をすえて、SHEP アプローチをニジェールの普及関係者に理解、自分たちのツールにしてもらう活動を行います。過去の支所だよりにおいて記されている、IPDR の ZIKA さんなど、既に育ち始めているニジェールの SHEP 人材を上手く活用しながら、ニアメを拠点に SHEP を国内にひろめ、定着するための研修を主体に活動をすすめていきます。今回の技プロも、プロジェクトの主体は人作りですので、なかなか成果が見えにくいですが、5 年間の活動を通して、農業省、そして農家の皆さんにポジティブな変化、成果が出現するよう活動を行います。

個人としては、前回、多くを学べなかったこちらの言葉を 20 年前の隊員の時以上にアップデートして使えるようにしなければと考えています。



PASVA の「園芸栽培 2/研修 1」専門家として赴任しました小手川隆志と申します。私が初めてニジェールの地を踏んだのは約 4 年前の 2015 年 3 月となります。その翌月に発行された「ニジェール支所便り」にも私自身の自己紹介文が掲載されていますが、「あまりの暑さに思わず舌打ちをする」といった書きぶりであるところ、ニジェールの自然環境に対する当時の私の苦悩・苛立ち・戸惑い等の心境がまざまざと思い出されます。ちなみに私が家族や友人にニジェールの暑さを説明する際には「上から熱で頭を押さえつけられる感じ。自然と顔が下を向き、舌打ちが止まらない」と伝えますが、我ながら機知に富んだ分かりやすい表現だと思っています。さて、本案件における私自身の役割についてご説明しますと、専門家としての肩書にあります通り、主要な業務は園芸栽培に係る技術指導や研修の企画・運営となります。過酷な暑さというのは園芸栽培においても大きな障害の一つで、低温性作物であるキャベツ等は、暑さが過ぎると丸まらない(結球しない)ことがあります。ニジェールでも暑さの厳しくなる 3~4 月頃には丸まってないキャベツが散見され「丸まらないその気持ち分かるわー」とキャベツと等身大で向き合うことができます*1。本案件では、C/P であり能力強化の対象である現地普及員と向き合い、現地農家と向き合い、そして暑さにめげずもりもりと成長する農作物と向き合いながら、プロジェクト目標の達成に向けて努力したいと思っています。約 5 年間のプロジェクトとなりますが、どうぞよろしくお願い致します。



*1 キャベツが結球しない要因は、この他に肥切れ・肥料過多・水不足・害虫による食害等も考えられます。

My name is **LAOUALI SOULEY GAMAL**, I am 37 years old, and I am single without children. I was born in Niamey and studied there. I have always had a passion for English and technology. So once I completed my level diploma, I decided to move towards a telecommunication school, WINTECH PROFESSIONAL INSTITUTE Accra Ghana, in which I followed a course of an Advanced Technician in telecommunication system. I had the chance to do an internship at Orange Niger where later I had a contract and started my professional career. Then I was engaged in the project VRACS as interpreter translator and Maradi region Coordinator. I discovered the job I do today. After four years in that project which finished in December 2015, I decided to continue my studies while redirecting myself towards the Projects and Enterprises management. The combination of the experience gained with the project VRACS and my last degree (Degree in Projects an Enterprises management) allowed me to be recruited by the new project of Improvement of the Agricultural Extension System in Niger (PASVA) of the Japanese International Cooperation Agency (JICA). I jumped at the opportunity because this new experience allowed me to develop my skills while giving me the opportunity to know better this sector of activity. Today I am part of a dynamic team and together I think we can accomplish great things



I am **Ibrahim Soumana Billo**. I was born on June 11th 1979 in Niamey. I'm married to one wife so far and I am a father of three (03) boys. I got my baccalaureat in 2001(serie A). After 06 months in language immersion I studied Business Marketing in Ibadan Politechnics. As professional experiences I worked with various NGOs and Humanitarian Organisations. From 2010 to 2012 I worked with JIRCAS as a translator. From October 2013 to December 2015 I worked as a Regional Staff for VRACS in Tahoua. From February 2017 to May 2019, I worked for the US Army Detachment in Dirkou (Agadez Region) and Ouallam as an interpreter and translator. On March 24 th I resigned from my job with US Army to join the PASVA Project. Both of my parents are Fulani. Related to languages, I speak five languages (Fulfuldé, Zarma, Hausa, French and English) and I'm fluent in all five. I'm thrilled and excited to join the PASVA, which I believe is another way to help out my people to be self sufficient related to food. I believe the SHEP approach on which PASVA will be based will completely bring a change among the farmers. I'm glad and happy at the same to join the Project team for its implementation.



向かって左から：ペロさん、長井専門家、ガマルさん、小川専門家、小手川専門家

■ ■ ■ みんなの学校:住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2 ■ ■ ■

『みんなの学校:住民参加による教育開発プロジェクトフェーズ2』では、初等教育分野と中等教育分野、二つの分野にて活動しています。初等教育分野においては、住民支援の校外学習に効果的なツールを導入することですべての児童の“読み書き”と“計算”の基礎学力改善を目指す『質のミニмумパッケージ』の開発と普及に取り組み、中等教育分野においては、アクセス、格差解消、教育の質の改善など、様々な教育開発課題の改善に貢献する“機能する”学校運営委員会(COGES)モデルの全国普及を進めています。

「初等教育分野」では、今年 2 月に始動した「質のミニмумパッケージ」読み書き・算数活動が、今年度パイロット対象の 101 校すべてにて、約 13000 名の児童を対象に順調に実施されています。しかも、開始から 1 カ月という短期間でいながら、現場の教員やファシリテーターからは、子どもたちの読み書き・算数の学力が上がったと評判です。そして何といても、児童たちが楽しみながら学んでいる様子が伝えられています。ある校長先生からは、「質のミニмумパッケージ活動を開始してから、子どもたちの村での遊びが変わった！」との報告がありました。以前村で行われていたゴム飛びやケンケンで遊ぶ子どもはいなくなり、最近の子どもたちのブームは、質のミニмумパッケージ活動で取り入れている、体を使って遊びながら“文字”や“数”を学ぶゲームの数々なのだそうです。

子どもたちの学習意欲の向上は、出席率の上昇や授業での積極的な態度からも伺われます。「質のミニмумパッケージ」活動を通して、より多くの子どもたちが学ぶ喜びを知り、自分自身の学ぶ力に自信を持ち、さらに学び進めていけるよう、今後も引き続き、より効果的で広く活用可能なモデルの開発・改善へと取り組んでいきます。



「質のミニмумパッケージ」読み書き活動様子 - 「学校」から想起する言葉は何？想像力を働かせ、みんなで意見を出しつつ、助け合って、言葉を書きだしていきます。



「質のミニмумパッケージ」算数活動様子 - 9つの石を投げて、「一の位」、「十の位」、「百の位」それぞれの枠に入った石の数で“数”を構成し、大きい数を作れたチームが勝ちです。今では村の遊びの一つになりました。

(みんなの学校プロジェクト専門家 影山晃子)

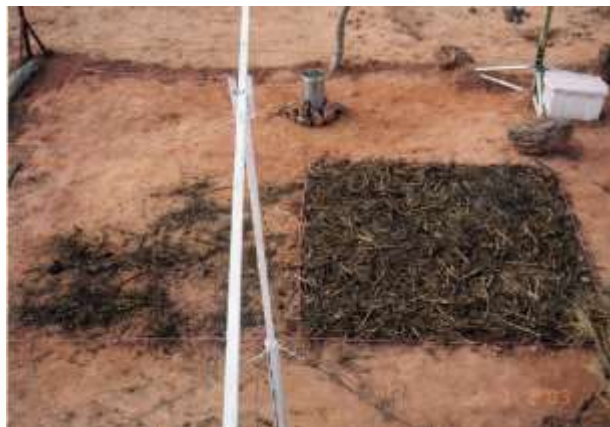
支所便り 7月号(2016)から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一准教授の～ニジェールでゴミを集める日本人～シリーズ第18話。今回は、これまでのフィールド研究の歩みについて振り返って頂きました。

わたしがニジェールでゴミを集めて、荒廃地にゴミをまき、緑化を始めて、かれこれ17年が経過しました。最初、ビニール紐で2m四方の土地を囲い、そこにゴミをまき、雨が降ると植物が生えてきたのが驚きだった。それは、2003年の6月から9月のことで、わたしが31才のときであった。そのころ、わたしの勤務していた大学では、東京都知事により大学改革の新しい方針が打ち出され、その後、大きな混乱の渦に巻き込まれることになったが、わたしは当時、助手で、授業や委員会の役割も少なく、サバティカル（研究休暇）をもらって、ニジェールの農村で研究活動に集中していた。

ニジェールに3か月も滞在することができたのは、この年のみであり、それはサバティカルのおかげだった。ニジェールには、現在のようにスマートフォンも、通信・ネットワーク網もなく、農村において純粋なフィールドワークに明け暮れていた。

毎日、ビニール紐の枠内で、どんなことが起きるのか、カメラとフィールド・ノートを手片に、朝から夕方まで飽きることもなく、ゴミがどう変化するかを克明に記録しつづけた。このときにまいたゴミは、農家の庭先にたまっていた家畜の食べ残しや糞、脱穀作業のトウジンビエの残渣であった。雨量計や気温計、風向・風速計を設置し、1時間ごとに計測を続け、データは自動記録された。毎日、ゴミの様子を観察するほか、1週間ごとに土層を観察して、土壌の硬度を計測したのち、土壌のサンプリングを繰り返した。

このときの調査の結果は別稿にゆずることにするが、荒涼とした大地をゴミによって緑化できることを知った。そのメカニズムを理解するには、その後、5年以上の年月が必要となったが、わたしは、ハウサとフルベの友人たちに後押しされるように、都市でゴミを集め、2008年に緑化実験を開始した。村長や長老の許しを得て50m×45mの土地を区切り、そのなかに4m×30mの短冊状の5プロットをつくり、1m²あたり5kg、10kg、20kg、45kgの都市ゴミを投入し、さいしょのプロットにはゴミを入れなかった。植物の種子をまかなくても、ゴミから植物が自然に生育し、その植物は人間の食料や家畜の飼料となる有用植物であることが分かった。それは、食料や土地の不足に苦しむ友人たちとの二人三脚の歩みであった。



ゴミの投入実験(2003年7月)。研究費もなく、わたしの緑化実験は手作り、小さなものから始まった。



ゴミによる緑化で、重要な働きをするのはシロアリである。この発見をしたのも、2003年のことだった。そっと動かすと、なかではシロアリが動き回っていた(2003年7月)



ゴミのなかでも、シロアリが好きなのはウシの糞だった。ウシの糞をコーティングするように、シロアリがシェルターを作っていた。(2003年7月)



(a) Plot 1



(b) Plot 2



(c) Plot 3



(d) Plot 4



(e) Plot 5

都市ゴミによる緑化実験の開始（2008年11月）。



(a) Plot 1



(b) Plot 2



(c) Plot 3



(d) Plot 4



(e) Plot 5

緑化実験の途中経過(2年目:2010年8月)。1年目にも植物は生育してきたが、2009年には大学の夏休みにニジェールへ行くことができず、緑色の植物を撮影できなかった。

わたしは2011年には大規模な緑化実験を開始し、観察を続けた。村びとたちに手伝ってもらい、50m四方のフェンスのなかに150トンの都市ゴミを播き、牧草地をつくった。フルベの友人にウシやヤギ、ヒツジを入れてもらい、夜間に滞在してもらった。家畜が植物を食いつくし、ふたたび荒廃地ができるのだらうと予想していたが、予想に反して樹木が生育しはじめ、2018年にはフルベの友人がいう理想的な放牧地ができあがった。フルベの牧夫たちがフェンスを見に来て、毎年、雨季のたびにできあがる草地に驚き、わたしのもとはフェンスの建設とゴミの投入をするよう要望が寄せられた。



150トンのゴミを入れ、風でビニール袋が飛ばないように砂をかけた(2011年10月)。

2018年2月には、フルベのチーフから、フェンスの建設を希望していること、その予定地を実際に見に来て欲しいという依頼を受けた。フルベの牧夫のあいだで噂が噂を呼び、わたしの活動がチーフの耳に入ったのである。わたしのニジェールの滞在期間はここ最近、2週間ほどと短く、建設作業とゴミの運搬に忙しく、着替える時間もなく、作業着のままチーフに謁見することになった。チーフは長身の男性で、顔をターバンで隠していた。チーフは近年、農耕民と牧畜民のあいだで紛争が激化していることを憂いていた。そうした厳しい社会情勢のなかで、農耕民と牧畜民の共存を願って活動をつづける、わたしの仕事について、チーフは労をねぎらった。わたしはチーフのために働けることを光栄であると伝えた。

わたしに同行したハウサの友人たちは簡単な挨拶ですこし距離を置き、フルベの友人たちは頭を下げ、握手をしながら丁寧に挨拶をした。チーフの車に先導されるかたちで、建設予定地を見に行った。チーフの土地は広大であり、その土地を車は走り続けた。農耕民の畑はなくなり、ひとつの村に行き着いた。フルベの小さな村であったが、井戸があり、小学校と中学校、それに家畜のヘルス・ポストがあった。車の到着と同時に、多



フルベのチーフとの謁見。椅子に座っているのがチーフ(2018年2月)。



暑さをいやすフルベの牛乳。牛乳の栄養価は高く、フルベの貴重な食料である(2018年2月)。

くの村びとたちが出てきて、チーフに頭を下げ、丁寧に挨拶したのち、来訪者を喜び、ひょうたんに入ったミルクを出してくれた。わたしは暑さをいやすため、ありがたくミルクを飲んだ。

チーフは100m×50mの大きさで、5区画のフェンスを建設し、そこへ都市ゴミを入れたいと話した。チーフの土地の南側には農耕民が定着し、トウジンビエの栽培を開始している。近年、農耕民と牧畜民の土地争いが発生し、フルベによる家畜の放牧も難しくなっていると話した。チーフみずからの家畜だけでなく、村びとたちの家畜をフェンスに入れ、家畜にはよい飼料を食べさせると同時に、作物の食害を契機とした農耕民との無用な紛争を避けたいのだという。地域の安定のためにも、フェンスと都市ゴミの投入は必要だと話した。チーフはわたしの仕事の意図を十分に理解していると、わたしは深く感謝した。

チーフは立ち去る際、村長に対し5,000CFA（約1,000円）の現金を手渡し、労をねぎらった。わたしに対して車の燃料代を請求するのかと思ったが、けっして、そんなことはしなかった。チーフの振るまいや発言に対し、フルベも、ハウサの友人たちもみな、「チーフの力は偉大である。尊敬し、忠誠心を感じる。」と述べた。わたしの友人であるベベはわたしに言った。「チーフの依頼で建設するのであれば、現場にフェンスや鉄材、ワイヤー、われわれのテントや家財道具などを置いたままにしても、盗む者なんていないだろう。安心して仕事をする事ができる。心配する必要はない。」



チーフとのフェンス建設予定地の視察。中心にいるのがチーフである(2018年2月)。

ハウサ語で尊敬はラダビ(*ladabi*)、忠誠心はビヤツヤ(*biyayya*)と言い、人生の歩みのなかでどちらも同じ道だという。この会話を友人たちと交わし、わたしも同意した。しかし、実は、残念ながらチーフの土地にフェンスを建設するという約束は実現していない。2018年9月末をもって、3年プロジェクトの三井物産環境基金のプロジェクト期間が終了したためである。いつか、かならず、このチーフとの約束を果たしたいと思っている。

2019年5月1日、日本では天皇の移譲により、元号が平成から令和となった。日本でも、ニジュールにおいても、国や民族、歴史、言葉がちがったとしても、他者に対する敬意、感謝の気持ちを大事にしながら、平和と平穏な生活を希求していきたい。わたしは10連休という稀有な長期休暇を京都の研究室で過ごしなが、その思いを強くしている。

大山先生の17年にも及ぶ研究の積み重ねと、その活動にずっと寄り添い続けてきた現地の人々。そうした活動だからこそ、現地の当事者の方々には細かな説明なくとも、ずっと受け入れられるのかもしれませんが。「尊敬と忠誠心はどちらも同じ道」。いつもハウサの格言にはハッとさせられます。いつかこのフルベのチーフと大山先生との約束が果たされ、その地が牧畜民・農耕民共存の象徴となる日が訪れますように！日本の10連休とは無縁なニジュールで、まだ見ぬ夢の楽園に思いをはせています。

京大先生シアター「アフリカ・砂漠の緑化活動 - 都市ゴミと家畜を使って - 」も是非ご覧になってください！

<https://www.youtube.com/watch?v=p11ImHj8RRE>



編集後記

やはり執筆者が多いと支所便りも豪華になりますね。編集を担当する身としては、嬉しい限りです。上述のとおり農業分野で新たに技術協カプロジェクトが始まったおかげで、常に一桁台だった在ニジェル日本人の数も、ときに二桁台に達し、かつての賑やかさを少し取り戻した感じがします。嬉しいこと尽くしの支所便りではありますが、その冒頭を飾る支所便りの顔ともいえる山形支所長のニジェル短歌が、ついに今月号をもって終了となります(⊙)。31文字でニジェルの風物詩を見事にとらえた短歌を、毎月楽しみにされていた方も多いのではないのでしょうか(私もその一人です！)。今月の短歌にもあるように、今ニジェルは連日45度近くまで気温が上がり、否応なく人々の体力を奪っていきます。ニジェルでは、昨日(5/6)からラマダンが始まりましたが、昨年にも増して長い長い1ヶ月になりそうです... ともかくにも、皆が健康に、平和にこのラマダン月を過ごすことができますように！ラマダン・ムバラク!!

(企画調査員 佐々木夕子)